

毎日新聞連載

『終わりよければ』を読んで
—全国からの声—

『終わりよければ』を読んで

——全国の読者よりの感想——

〔創思社編集部より〕

この項は著者（吉田嗣義）が毎日新聞（西部本社版、一部全国共通版）「シルーパひろば」欄に平成元年（一九八九年）二月七日から同年十月一日まで三十五回（週一回）にわたって連載した「終わりよければ」（本書のタイトルも同じ）に対し、全国の読者から著者に直接寄せられた感想の手紙またはハガキですが、これをまとめて再録致しました。

なお毎日新聞西部本社にも、これまた多数寄せられましたが、新聞社の立場、都合上、掲載を見合わせることと致しました。

ここに掲載致しました分は、当編集部で、熟考のうえ独自に選択、関係者に了解を得て要約、掲載したものです。また住所氏名については簡略に、さらに敬称を略しました。

この欄で2月7日から始まった「終わるよければ……」は本日で21回目を迎えました。筆者の吉田嗣義さんは一つの区切りとして手元に届いた激励や反応ぶりを今回、取り上げられています。シルバー字から伝わってきます。今週は、投書の一係にも連絡直接から数多くの電話や30内容の一部を紹介します。

読者の激励・反応から



シルバー係に寄せられた投書



「おむつは命」に大きな反響

厳しい現実、人々

係に寄せられた投書は大きく二通りに分けることができました。一つは、すでに高齢の方に達し、厳しい現実に直面している人たちからの投書です。もう一つは、身内にボケ、救いと老人福祉のあるべき姿を見いたしていることでした。

「このような方(吉田さん)は、まだ生きていますがどちらにも通していけるは実際には特別養護老人ホームを運営されている筆者の方です。吉田さんの考え方生き方にす。もう一つは、身内にボケ、救いと老人福祉のあるべき姿を見いたしていることでした。

「このように、吉田さんたる立場は違いませんがどちらにも通していけるは実際には特別養護老人ホームを運営されている筆者の方です。吉田さんの考え方生き方にす。もう一つは、身内にボケ、救いと老人福祉のあるべき姿を見いたしていることでした。

「このように、吉田さんたる立場は違いませんがどちらにも通していけるは実際には特別養護老人ホームを運営されている筆者の方です。吉田さんの考え方生き方にす。もう一つは、身内にボケ、救いと老人福祉のあるべき姿を見いたしていることでした。

が理事長をしておられる任

ら放日後、ご夫婦のペッドの

双方、置かれた立場は違います。ですがどちらにも通していけるは実際には特別養護老人ホームを運営されている筆者の方です。吉田さんの考え方生き方にす。もう一つは、身内にボケ、救いと老人福祉のあるべき姿を見いたしていることでした。

「このように、吉田さんたる立場は違いませんがどちらにも通していけるは実際には特別養護老人ホームを運営されている筆者の方です。吉田さんの考え方生き方にす。もう一つは、身内にボケ、救いと老人福祉のあるべき姿を見いたしていることでした。

が理事長をしておられる任

ら放日後、ご夫婦のペッドの

が理事長をしておられる任

毎日新聞（西部版・平成元年7月4日付）

人生の終わりを大事に

——それぞれの人たちの思いやり——

〔佐賀県多久市、特養ホーム天寿荘園長・諸隈博子〕

——前略——先生の毎火曜日の「終わりよければ——任運荘からの報告」読ませていただいております。今回の〈福祉職は聖職でない?〉を読んで、ほんとうに先生のおっしゃる通りです。「人間性をもつて人を援助するなら聖職意識が出てくるのは当然」。だからこそまた、相手に、より深い思いやりの心が生まれてくるのではないでしょうか。

——中略——現在、屋内消火栓設置工事とともに全居室の模様替えをしています。新年度の予算では、特養の個室化も認められておりますが、前年度の工事でしたので四人部屋を基礎にしてプライバシーを守ることでした。廊下側から見えないようにスリガラスのドアを、ベッド間にはロールカーテンで仕切りをつけるのですが、これでも県を説得するのに半年かかりました。三月末に完成の予定です。

先生のお書きになつたものは、ややもすれば安易になりがちな私の心のブレーキとして、また

施設運営の助言者として、いつも身近に感じております。

——前略——『終わりよければ』を毎回期待して読んでおります。こんどの「九十七歳の前進前進」、すばらしいことと思いました。入り口のところで間違えば、問題老人としたかも知れないお年寄りを、「生涯で最大の出来事は、この世に生まれたこと」と言わしめた任運荘、一人の人間を大切に考え、お世話しておられることに、また改めて感動いたしました。——後略——

痴呆老人と呼ばれる寮友を見て

〔和歌山県美浜町、養護老人ホーム・ときわ寮、矢倉房枝〕

——前略——聖職者の聖なる愛溢れる寮母様がたのお働きに感動いたしております。私なども、明日にもそうなるかも知れない身でありながら、痴呆老人と呼ばれる寮友に、つい「説得」で対し、自分自身が興奮してしまった傲慢な愚かさを繰り返してしまいます。私自身の御教示として拝読しております。全くこれぞ、聖職者、ならずして誰に出来得るお仕事でありましょうか。

日本という国は、ときどき理解に苦しむ奇妙なご発言を得意顔でなさるエライお方の居らつしやる国のようでございます。先生がお元気でいらっしゃってくださるのを祈る理由の一つは、こ

こにもございます。——後略——

心の背筋をしゃんと伸ばして

〔大分市、甲斐公典〕

——前略——私もかねて、「終わりよければ」こそは「人間の見事な終焉を彩るに最も大切な命題である」と心に收めておりますが、この点、文中の、心の背筋をしゃんと伸ばしている高年の姿こそは、老いやく私たちの理想であり、心の中心に据えねばならぬものだと思います。はじめのころ（第二回目分）の「ボケを恥だと思わない……」の「生まれ変わつても……」のところから、その成り行きを心配する私たちの心を一気に惹きつけながら、大変な感動を与えられました。——中略——今日、人が生きる大切なものを置き去りにしている「飽食」「自失」の現代人に、劇的とも思える覚醒の一文になつてゐるものと思つています。——後略——

人が人を見取る介護の源流

〔福岡県遠賀町、樋口晃子（特養ホーム元寮母長）〕

——前略——“心の背筋をしゃんと伸ばして、は、まさに至言。老人が、自分の生を完うするためには不可欠のものと思います。しかし、そのためには、暮らして行くための必要なものがなく

てはならない。そのための老人有権者の自覚……それの欠如していることに私は“教育”的恐ろしさを感じています。低いところから周囲を見ても限られたものしか見ることができません。高所に立つてこそ、山あり、川あり、野原あり、人家あり。何が善なのか悪なのか、また自分のしなくてはならないこととは何なのか？広い視野を持つことを恐れた日本国の施した教育の成果を見る思いがするのです。

まさに、背筋をしゃんと伸ばして顔をあげて生きて行きたいと思います。（『終わりよければ』の第一回目の掲載文を読んで）。

（第二回目を読んで）——前略——痴呆老人を抱えるということは、実際、家の中で体験したものでなくては本当に理解できないことだと思いますが、「来世も親子で……」と、そのお母様のお言葉に、ご自分の揺れ動いた心を責めておられる、こんな時、人の心の中に仏様が宿られたのではないかと思いながら読ませていただきました。

人が人を看取る——介護する源流を示していただいているような思いがしました。

先生は“怒るな”とおっしゃいますけど、現場には、怒りの種子がいっぱいです。つい先日も、園に踊りの先生が見えました。月に二回ほど“指導”ということで見えるのですが、私の在職中は対象は入居者です。車椅子のままで、たとえ片手だけでも踊るようにしようという指導を

お願いし、実際、ブロック大会では、動ける方は輪の中に入れていただき、車椅子の方は私ども職員が踊りの動きに合わせて押しました。それも無理で、でも出たいという方は、舟の模型の後ろに車椅子のまま坐って、手だけで参加していただいたものでした。

それが現状は、対象は職員でした。ホールのぐるりに老人を坐らせ（強制的に）、職員のみに指導です。なお当日は、例によって出勤者が少ないので踊りに駆り出され、他の処遇はストップ。厨房も、三名しかいないのに一名参加させられ、いったい何のための踊りかと、例によつて私は大憤慨しておりました。——中略——入居者が楽しんでくれば、それが何よりと思います。でもこれでは職員のクラブ活動ではないでしょうか。この先生は自分が属している踊りのグループの発表会の際、園の職員を出演させます。私の園は二十代の人が多いし、六・七名参加させますので、ご自分の体面は保てるのでは……とは私の疑心暗鬼なのですけど。

大きな顔をして、自分は老人のためにしてやつているというその態度は、不快でなりません。「老人のための指導をして下さい」ということを言い出せない園の対応にやはり腹が立ちます。こういうところは、エアロビクスの強制と共通のものを感じます。

（第二十六回目を読んで）——前略——八月八日（平成元年）の先生の『終わりよければ』、常といささか異なる思いで読ませていただきました。寮母へ対する先生の思い、——でも、あの

一文をよく読み返しますと、そこには先生の尽きるところのない、人間への愛、を汲みとることができるような気がいたします。

「寮母のかわりに自分が叩かれたかった……」というくだりは、私の胸をジンジンとうちました。職員をここまで愛してくださつてる……。これは寮母冥利に尽きるのではないかと思うのです。しかしまだ一步ふりかえれば、任運荘の職員が、先生のこの付託に応え得るという理想的なスタイルではないかと思います。

——中略——ある園では、寮母中心ということを履き違えて、寮母専横の思いをしたことがあります。私の考える寮母像というのは、先生のおっしゃるように、施設の中心的存在ではあっても、君主であってはならないと思うのです。寮母だけでも施設は動きません。この寮母職を支え、看護、厨房、事務……と、それぞれがそれぞれの分野で、各々のパートを充分にこなすことではないでしょか。入所老人の生活を支える大部分を寮母が担当します。しかしながら、これを支えるシステムがしっかりとしていなくては、老人の生活は成立しません。

施設を“家庭”とみなすなら、各パートの、もつと、否、専門分野への援助もあつてよいのではないかという思いもします。母が疲れた時、カバーしてくれる家族があります。隣人があります。国の決める施設職員の絶対数の不足のほかに、施設職員の人生哲学の不足もあるように思います。資格云々というのとは別に、職員の資質の問われる所以ではないでしょうか。

『終わりよければ』は、実に多くの問題を投げかけてくださっています。先生が実際に施設運営なさりながらの報告であるだけに、訴えるものが大きいように思います。今回の分は、『長』たるもののは在り方を大いに問い合わせられているようと思えるのです。人が人の上に立つということ、その難しさが今回のレポートから切々と訴えられているようにも思います。安易に人の上に立ち、入所者の人生を支配する……。老人施設の悲劇は、そこに源があるようと思えてなりません。——後略——

人の世は、まだ見捨てたものじゃない

〔福岡県大牟田市、藤田勝代〕

——前略——毎日新聞『終わりよければ』を拝読させていただいております。各回にわたり胸を打つことばかりで、涙することも幾度がありました。文中に、この私自身の姿を見る思いが何度もなくありました。決して他人事とは思えません。

——中略——毎回、文ごとの最後に、「ご意見、ご感想を新聞社の係までに」とありましたが、一度もお便りは出せませんでした。しかし、「ああこんな先生も、このカネ万能の世にいらっしゃる」という嬉しい思いに、「人の世は、まだまだ見捨てたものじゃない」と胸をなでおろしたものでした。

先生！ 任運荘の存在！ 先生のようなお方がこの世にいらっしゃるということは、心の支えです。大きな喜びを持つことができます。

十月十日（平成元年）の最終回では——批判精神を眠らされ、官製のボランティア活動にのみ依存・協力し、実際は一大政治力になるべき数を持ちながらゲートボールなどに発散している等。もう一つは理想喪失の若者を覆う著しい老化現象。老人層の体制への絶対従順の無気力さ。いざれをとっても悲しくなります。——後略——

花のもとにて、春死なん

〔山口県下関市、岡村毅一（一〇〇歳）〕

——前略——『終わりよければ』を、こころ豊かに欠さず読まさしていただきました。今日までの私をかえりみて、花もあり、嵐もあり、悲喜こもごも、一喜一憂でした。

過ぎ去りました徒然草の……命長ければ恥多し……現在ただ、ボケ老人になることだけを恐れています。

願わくば 花の本にて春死なん

この如月きさづづきの望月むづつきのころ 西行法師

凡夫のかなしさ、この心境にはとてもとても。恥しい限りです。
ある宗教団のカレンダーに、

岩もあり木の根もあれど、さらさらと
たださらさらと 水の流るる

何事も われ一人のためなりき

今日一日の いのち尊さ 合掌

弱い老人のために、これからも頑張ってください。お頼みします。

文通で、お互に慰めを

〔福岡県行橋市、大井たま枝（七六歳）〕

——前略—— 「終わりよければ」を読みましてお便りを差し上げたく思つていました。それはお世話されているご老人の方々と文通でも致し、お慰めできればとの心からでございます。今日の文には、羽田野モエ様のことが出ていました。短歌などなさる方のようでございますので文通しどうござります。私も文学の方に少しばかり趣味を持つていて、物を書く事が大好きです

ので、文通の道が開ければ、これに越した喜びはないと存じます。

人生の終わりに向かって、良いお友達ができることは、すごく楽しいことです。任運荘の文学好きの方々、どうぞお便り下さい。——後略——。

老人ホームに規制はいらない

〔東京都練馬区田柄、横谷溪水（七九歳）〕

——前略——『終わりよければ』の中の「寮母は宝」、まさにその通りです。私の居るホームは四月（平成元年）に開設したばかり。入居者一〇〇人に對し寮母は三〇人。夜勤は四人で、終日おむつ交換に汗水たらして忙しい。このホームは近代的で、昔の養老院という暗いイメージは無い。寝たきりに近い人もいれば、歩行可能な人もいる。半分が車椅子。元氣で平常に近い人もいる。私もその一人だが、不自由な人と同様に規制されるのは不満である。

以前から他のホームで聞いてはいたが、「タバコは駄目、酒も駄目、テレビもラジオも不可」。そして職員の態度だが、「お前たちは福祉でやつてもらっているのだ。私たちが世話ををしてやつているのだから黙って言う通りに……」と、入居者より優位にあるが如き考えが見受けられる。まるで収容所のように。

——中略——さてホームの入居費であるが、月十四万円、支払い能力のない人には、その不足分

を自治体が補助してくれる。ホームの運営については国の助成がある。したがって入居者は、誰が不足分を出していようと皆同等の資格と権利を持って入居しているのであり、小さくなっている必要はない。雑居部屋であれ、賤しいながらも愉しい我家である。施設に、また同居者に迷惑・被害を与えない限り、規制されたくない。特別養護とは言つても基本的人権はあるはず。これからは古い思想・観念を捨ててもらいたい。

——中略——家に帰りたい、死にたいと泣き叫ぶ者もいるが、ここで死ぬまでと思うと気が滅入ってしまう。家族から見放され、^{うばはなま}姥捨山に入れられたと思う老人たち、さもあらん。

——後略——

お教えください

「シルバーホーム」の運営方法を

〔神奈川県平塚市、藤沢英子（七七歳）〕

——前略——私は七十七歳の老婆ですが、毎日新聞の家庭欄で先生のことを知りました。まさに「終わりよければ」ですが、世のため人のために私に手助け出来ることがあればと、かねがね念じておりました。それは少しずつでも資金を出し合って、小規模でもよいから、シルバーホームをつくれたら……と。その矢先、土地の提供者が現われてくださり、お互に協力し合ってその

実現に努力しているところでございます。

そこで、先生のところのような理想郷に少しでも近づきたいものと、ご教示をお願いしたいの
でございます。

土地は一〇〇〇坪で、場所は平塚市外の至って環境の良い所です。資金は恥かしながら現在の
ところ一千万円ぐらいです。とにかく平塚方面には、まだ十分な施設がないものですから、なん
とか実現に漕ぎつけたい気持でいっぱいでございます。——後略——

寮母さんは『宝』です

〔茨城県つくば市、水島愛子（七二歳）〕

——前略——私は茨城県つくば市にあります老人ホームに入居している者でございます。七月二
十五日（平成元年）付毎日新聞朝刊で『こころ豊かに』というタイトルの記事を読みました。先
生のお言葉「ホームのお年寄りに献身——寮母さんこそ『宝』です」とのことに深く感銘いたし
ました。

——中略——私の入居しているホームは財団法人の福祉施設です。七十五人の人間模様のはげし
いところです。まあ、男女の関係は二、三組のようです。それもひっそりとです。

——中略——九州の方の毎日新聞に『終わりよければ』というタイトルで連載されていますと

か、私もぜひ読みたいものと思つております。入手方法をお教えください。私もそろそろ「ぼけ」てきました。「こころ豊かに」を持つには、どうしたらよろしいか？ これも是非々々お教え下さい。お願い致します。

「福祉は人なり」を再確認

〔熊本市、慈愛園乳児院長・潮谷義子〕

(第六回目を読んで)——前略——卒論テーマがやっと決定した長男が一週間の予定で帰省していますが、この子を含めて今朝は「オムツは命」の記事に沸いています。「老人福祉法がどうのとか、地域福祉の問題とかばかり必死になつて学んでいる自分たちも、問題と思う」と話していました。実習の時に、生命の尊厳にふれるような経験も乏しく、なんとなく対象者を客観視し、施設の取り扱いを“是”としていた。オムツの交換が隨時か定時か全く気にもしていなかつた、としみじみと話していました。

言い古された言葉「福祉は人」ということを、わが家全員で確認いたしました。また職場の朝の礼拝では、潮谷の方からパウラスホームにあつた随時交換が今では定時交換が当り前のように悪くなつた経過にふれていました。哀しいことですが、人は易きに流れるのに時間はかかりないです。

息子の若さゆえの発見でしょう、「自分の生命が自分で操作できない時がある、くる」ということを今まで思つてもいなかつた……」と。

表現できない人の意志を汲み上げていくのは、技術というより、人間性の問題。簡単に言うなら「自分にして欲しいことを、他人にもしてあげること」と、こんな息子の会話に安心を覚えるのは、私たちもやはり年齢でしょうか。

前後いたしますが、『聖職論』まさにケースワークの中に要求される思想と思いました。聖書にも「神の国は、実にあなた方のただなかにある」「人は心に自分の道を考え計る。しかしその歩みを導く者は主である」と記されています。神が人間の相対的な歴史の移り変わりを人の意のままに許されず、隣人のために、神から与えられましたタラントをいかしていくことの大切さ、それが召命による働きと思いました。——後略——

(第九回目を読んで)——前略——【終わりよければ】の掲載される日を心待ちしながら一週間を追っています。潮谷と今朝(11日)も話したのですが、理事長は自分の施設の在り方に誇りと自信をお持ちだし、それが、全国の老人施設に拡がればよいと願っています。でも、いざそのことに理事長がふれられるとすれば、よい内容でも自画自賛していると思われそうで、表現が難かしいところと思います。働く人たちの心にふれる内容は、第三者の場合が、こだわりなく出すこ

とができるようになります。——後略——

「任運荘」を見たくなりました

〔宮崎市大工、飯田洋一・富恵夫妻〕

(「終わりよければ」の連載を読んで、任運荘を直接訪問) ——前略——任運荘までの遠い道のりも、疲れも、感激で吹き飛んでしまいました。本当にあるんだなあ、こんな素適なホームが……と、誇張でなしに胸が熱くなりました。

帰りの車の中で主人に、「父さんも任運荘に行けたら、今でも元気でいられたかも」と話しますと、主人も大きく頷きました。

——中略——家に帰り、父に一番に報告しなきゃあと思い病院に行きました。ホームの中の私の見てきた事、聞いた事、すべて話しました。父は目をまあるくして、じっと私を見て、「うー、うー」と言いながら頷いて聞いてくれました。「元気になつたら、父さんも、連れていつてあげるからね。一緒に見学に行こうね」というと、目をつぶって、うつすらと涙を流していました。できるなら、本当に、父を任運荘に連れて行ってあげたいものです。

母も私の話に感激して、ぜひ一度いつてみたい。そして「お金があれば、任運荘のようなホームをつくりたい」と、夢のようなことまで言っていました。——後略——

ホームで高齢者を

拘束するのは犯罪行為

〔埼玉県大宮市、永杉喜輔（群馬大学名誉教授）〕

——前略——「寮母は宝」「病母も宝」、感動しました。昨日、新年度第一回の群馬の社会教育委員会。こんどは「老人問題」をとりあげることにしました。委員四十年、議長十何年、しかも他県に住んでのことなので、二、三年前から辞めると言っているが、「またやれ」ときかない。仕方ないので最後に引き受け、老人問題をとりあげることにしたのです。「終わりよければ」が私に最後のやる気を起こさせました。

——中略——「終わりよければ」、整理して是非一本にして下さい。楽しみにしてます。

——前略——九州からの帰りの飛行機の中で連載の「終わりよければ」を読みました。それによると、「高齢者を拘束するは犯罪行為」とある。九十四歳の母を付添いのいらないというホームに入れた息子が見舞いに行ったら、その母が一室に鍵をかけて閉じこめられていた。またあるホームでは、手をくくられている老人もある。それらの実例を挙げ、憲法31条で、法律の手続きによらなければ誰も絶対に自由を奪われない、と規定されてあるという。許されているのは精神病

院だけだ。それを監督すべき国や県が、知らん顔で放置しているという。

人間、終わりよければすべてよい。過去の苦労がラクのタネとして思いおこされる。「子供なら、いいなめる必要もあるうが、死ぬだけの老人をたしなめて何になる」というのがここ（編集部註・任運荘）の方針である。年寄りを拘束する老人ホームで、恐怖におののく無数の人。これからも同じ運命に泣くであろう人たちのために、彼（編集部註・著者吉田嗣義）はあえて事実を告発したのである。

九十九歳で精神病の息子を持つ人が、何度も自殺を図ったが死に切れず、人に聞いて、「任運荘」に行ってみてから自殺しようと思って「任運荘」に入ってきたが、「もう自殺はやめた」と明るい顔になっている人にも、私は会った。創設（編集部註・「任運荘」）の時から私はここに予約しているので、いつボケても安心だ。受験戦争で親が子をしばり、その子が長じて親をしばるのが、今日の平和国家・日本か、ああ！（『くたかけ』 平成元年九月号、敬老の日に寄せて「終わりよければ」）特別寄稿より一部抜粋）

——前略—— 「暗いホーム」——みんなやる側の都合ばかりで、受け手を考えない。一昨日も大宮（埼玉県大宮市）の青少協委員10名で金沢市視察。金沢では市長をトップに市役所のおエラ方で青少年対策本部という会議をもつていると自慢したので、「対策とは何事か、非行対策ならよい

が、健全育成まで対策というのか。政治家対策、役人対策といわれたらよい気がせんだろう」と発言したら、誰も何も言わなかつた。埼玉県にも婦人対策課、あつたのを婦人行政課に変えさせた。育成政策が間違うから対策が必要になるというのが小生の主張。一事が万事、相手の立場を少しも考へないおエライさんが多い。もっとも相手の立場に立つことは非常にむずかしい（私もこのごろの大学生のことがよくわからん）が、努力だけはやらないと……。——後略——

オムツ換えて感謝を

〔宮崎県清武町、病院に入院中の患者〕

（第六回目を読んで）——前略——毎日新聞を拝見して感動し、すぐペンをとった次第です。

私、只今、入院中にて、足も手もこのようにやつと字が書ける状態で、ずーっとベッドに寝たきりで、もちろんオムツのお世話になっています。

一日多いときは十回ほど便が出て、その都度すぐ換えてもらいます。看護婦さんもイヤな顔ひとつせず換えていただいています。

新聞のように日に五回だけとか、きめてしまつていると本当に可哀相ですね。自分がこのよくな立場になつて、初めてわかりました。换えてくれる人のたいへんさ、换えてもらう人への心くばり。ほんとうにこの病院に来てよかったですと感謝しています。名前はわかりませんが、任運荘の

理事長さん、声を大にして皆様にお伝え下さい。「オムツを換えてもらう人も、換えてくれる人も、信頼と感謝を……」。

老いは、生きる姿を問いかける

〔宮崎市、牧村和子（主婦・四八歳）〕

（毎日新聞・平成元年十一月九日付「女の気持ち」欄『いとしきは老い』より）——老人と子供が共にいる情景——とてもバランスがとれていると思う。

私は最近、ドイツの作家ヘルトリンゲの『ヨーンじいちゃん』という本を読んで、非常に感銘をうけた。

ひとり暮らしの頑固者のヨーンじいちゃんが核家族の一員となり、いろんな騒動を起こしながらも皆と馴染んでゆく。病氣で死んだ後、いつもヨーンじいちゃんが座つて新聞を読んでいたソファの端が空っぽになつたのを見た子供たちは、どんなに彼が愛すべき大切な存在だったかを知る。

国は変わつても、人間の心が感ずることは全く同じなのだ。時間の経過が、人ととの別れを避けることのできないものにしてしまう。老の先にある死をみつめたとき、人は初めて豊かに生き始めるのではないだろうか。

私は数年前から、市の介護ヘルパーとして老人家庭に接する機会をもつが、年寄りにとって一日を無事に過ごすことが何より大事なことを知った。社会的生産をしなくとも、そこに存在し、語りかけ、老いた姿そのままが生きる意味を問い合わせている。めまぐるしい現代社会の中で、お年寄りに接することは、何か忘れかけていたとても大切なことに気ずかされるようと思う。

毎日新聞に連載された「終わりよければ」を毎回、胸のあつくなる思いで読ませていただきたいが、古いを人間のトータルな生の完成と考えるなら、悲しむのではなくて、^{いのち}生命の輝きの時、と伝えたい。

新たに、献身の誓い

〔山口県長門市、西村佐代子（特養ホーム寮母）〕

——前略——先日来より『終わりよければ』を拝読し、施設内の出来事、寮母さんへの指導と理解、老人の扱い方など、その一言一句を目が丸くなるほど繰り返し読み、ただただ感銘いたしております。

——中略——現在では、その連載記事を切り抜き、大切に保存とともに、過去五年間を振り返り、もっともっと社会のため、老人のために献身することを誓い、心を新たにしております。つきましてはまことに勝手ながら、直接にお話をうかがえます機会と施設内の見学をお願いでき

ますればと、ペンを取りました次第です。——後略——

「自分史」を綴るは素晴らしい

〔大分市、甲斐公典（二回目の便り）〕

（第二十八回目を読んで）——前略——『終わりよければ』の掲載日を待ち望むようにして熟読しております。さて今回の文中、「自分史」展示とありましたが、これは心暖まるものであったと思っております。入居の方々が「自分史」を綴る中で、自分の“来し人生”を振り返ることは素晴らしいことだなあと思っております。それにしても古庄トミさんの「自分史断想」は、仏性をもつ人間の最高の境地に達しられているのではないでしょうか。人間も晩年に、このように素晴らしい心境が得られれば、どんなに幸せかわかりません。少し生きる勇気が湧いてきました。——後略——

人間、生きることの貴さ

〔北九州市、吉田健治（毎日新聞西部本社編集局）〕

——前略——吉田さんの最近の文章はすごいです。「文は人なり」と言います。精魂傾けられた内容が伝わってきます。私は読ましていくながら、胸が苦しくなり、目頭が熱くなってしま

たがりません。

吉田さんという方を知つて、本当によかつたと思つてます。まだお会いしたことはありませんが、電話やお手紙でお人柄に触れるこどもできました。「一期一会」という言葉の持つ深さをかみしめております。

昨日（九日）福岡市内で、おふくろ（80歳）、叔母（70歳）、そしておふくろの兄・伯父（84歳）が大阪からきて、みんなと再会しました。生きていること、しかも元氣でいられるとの有難さを感じました。

それにしても、生命ある限り、懸命に生きる人間のなんと貴いことか、ということ、吉田さんの文章から教えていただき、私どきものにも、少しずつではありますが見えてきました。――

後略――

「福祉職は聖職」なり

〔大分市、井上寅太郎（元特養ホーム園長）〕

――前略――毎日新聞に先生の文章が掲載されていることを知り、早速火曜日ごとに大分駅に新聞を買いに行っております。ずいぶん大きなスペースに驚きましたが、それだけ大きな期待を持たれていることと拝察しています。まだ二回だけしか拝読していませんので、その後の展開はわ

かりませんが、これまでの限りでは、吉田先生の一貫したヒューマニズムがにじみでていることに強く印象づけられました。これから六ヶ月の長きにわたる連載、いろいろユニークな展開があることと楽しみにしています。——後略——

(第四回目を読んで) ——前略——【終わりよければ】欠さず拝読いたしておりますが、今回の「聖職」論、深く感銘いたしました。特養の職員の「聖職」であることがさらに強く感じられます。これも先生の勝れたりーダーシップと、よきスタッフに恵まれてのこと、羨ましい限りに存じます。——後略——

「オムツは命」なり

〔福岡市、柴田こう子(七二歳)〕

——前略——私は眼病で読み書きは不自由ですが、先生の文章を拝読しては心の支えにしています。とくに第六回目の「おむつは命」は、地獄で仏のおもいで、この掲載紙を持って病院にかけつけました(76歳の半身麻痺の夫がオムツづけにされ、涙ボロボロだったからです)。夫はお尻の湿疹で、濡れたオムツが禁物なのに、ヘルパーさんは「時間がきまってるのよ。濡れるたびに換えていたら、たまらんよ」と、とりあってくれません。親身なケースワーカーに、先生の記

事を見せ、婦長さんやナース宛に嘆願書を書き、数日後に見舞に行きましたら、なんと、しびんがベッドの横に置いてあり、不自由ながら左手で使っていました。言語障害もあり、痛ましい限りですが、オムツを夜だけにしてもらつたことが「涙くん、さようなら」になつたようです。自力で半身を起こし、床ずれゼロも目指しています（リハビリの青年たちは、とても献身的です）。

現在の入院費などの状況を申しますと、主人は元高校社会科教師で、61年5月より脳梗塞で六回目の入院。入院部屋は大部屋で八人。入院負担金（一ヶ月）一一、〇〇〇円、紙オムツ代（一ヶ月）一九、六〇〇円、洗濯代（一ヶ月）二〇、〇〇〇円など合計六万円近くです。

——中略——思いますればこの乱世に、これほどまでに老人福祉に真剣に取り組んでくださる吉田先生に、感謝でいっぱいです。アドレスを掲載された新聞社にもお礼申しあげます。

役人の驕り

〔某省・元課長〕

〔福祉は聖職か?〕を読んで)——前略——二月二十八日付の第四回の玉稿拝読いたしました。某課長の「聖職者意識」は、かつての某老人福祉課長と同様に、官僚の驕りのようなものが感じられます。

このことは、なかなか役所の中にいますと、気の付きにくいことでした。補助金のことなどが

あって、民間の人がチャホヤすることの意味にはなかなか思い当りにくい訳です。このように本来は専門職にとどまるべき役所の人が、どうして価値観に介入するようになってしまったのでしょうか。私はつねづねこのことを考えました。とくにヨーロッパの役所の人は、この点スッキリしていました。ヨーロッパとの対比で気のつくことは、教科書的ないい方ですが、本来価値観で動くべき人達——政治家やジャーナリズムがしっかりしており、日本ではあまりはっきりとした方向もなく、かなり大切なことまで役所（行政）に委ねてしまってきたことがあります。

「福祉職は聖職である」

〔沖縄県那覇市、安里盛市（元小学校校長）〕

（第四回目を読んで）——前略——厚生省の課長の「福祉は聖職に非ず」に対する反論、それは高い福祉の理念のもとに、施設をあげて厳しい実践を続けていらっしゃる体験からにじみでた言葉で埋められ、深い感動をおぼえました。

「福祉職は聖職である」——それは献身的に働いている職員に対する感謝の心から、出るべくして出てくる言葉だと思います。観念的に「福祉は聖職に非ず」と論ずる者の近寄りがたい境地を築いていらっしゃる任運荘の方々への冒瀆だと思えてなりません。

その職に従う限り、使命感の一端には繋がってほしい。そうでなければ、福祉の作業ではなくなるのだ。使命感に疑問を抱いたり、耐えられなくなつたときは、去る以外しかないはずです。

——後略——

(第三十四回目を読んで) ——前略——工藤ティイさんと高山ヨシさんの旅立ち、人間の崇高な精神の営みに学ばせていただきました。

「ここは天国へ旅立つにふさわしい、この世で一番の憩いの港——そうでなければ、任運莊はなしに等しい」——この日本の現実の中で、このような崇高な、真摯な営みが現に存在することに驚くと同時に、全く頭の下がる思いをしております。——後略——

役人は、思い違いをどう自覚するか

〔安田陸男（毎日新聞東京本社・編集委員）〕

(「福祉職は聖職か？」に関連して) ——前略——浅野さん（厚生省児童局障害福祉課長）の人よさも理解できました。間違えるのが人の常。問題は間違いをどう自覚するかで人の判断が変わると思います。

とくに職業柄、中央の役人や新聞記者など、過保護に育つ職業人に欠けるのが、自戒です。い

つも思うのですが、人間って、いや、ある程度、自分の価値観をつくりあげたと自認する人間にとつて、自分の誤ちを指摘されるほど辛いことはないでしょう。その辛さを積み重ねてこそ、いつまでも人の育ちはみられるものと思っています。辛さを責任転嫁でしのぐとすれば、その人の価値は下がるだけですから。

——中略——『終わりよければ』を、そのたびに読ませていただいています。「床ずれ」への怒りが、よくわかりました。人間の尊厳に根づく問題であることも。

いつかくる日の旅立ちを

〔福岡県豊前市、宮地政子（特養ホーム入所者）〕

——前略——連載『終わりよければ』の日のくるのをホームの皆さんと一緒に楽しみにしております。昨日（第三十二回目）の記事（老人のあの世への旅立ち）には、ほんとうに胸を打たれました。それぞれ年老いて高慢の人たちが、死を目の前にしながら、自分の思いを通そうと固い心の人こそ、寮母さんのやさしさに誠の心が表われた人たちです。そして安らかに旅立ちされた老人の姿に手を合せたい心地がします。私たちも、こうして温かく包まれたホームでの生活に、合掌して過ごさせていただいております。有難いことです。——後略——

あ

と

が

き

あとがき

昨年末から本年始めにかけて、NHK教育テレビで「おむつは命」というテーマで、任運荘の姿が放送されました。放送が数回繰り返されたためもあって、私たちが恐くなるほどの反響でした。放送でも述べましたが、私たちは特別のことをしているのではありません。わがホームを利用される高齢者の方がたに、ごく普通の暮らしが間違いなくあるよう、ただそのことだけを努力しているのです。

しかし、老人ホームでの生活だけでなく、普通の家庭生活でも、晩年に至るまでの人間としての普通の暮らしが、果たして保障されているでしょうか?いまや甚だ疑問です。

老齢化社会における根本問題は、「弱りながら長生きする」という実態です。かつては弱ったまま長生きすることはほとんどなく、社会問題とはなりませんでした。弱って長生き、したがって弱って苦しんで長生きするのが現代の著しい特徴です。

そうした高齢者の境涯に視点を集中し、晩年においてこそ「よき終わり」が保障されるために、「われら何をなすべきか」を、老人福祉の現場から訴えました。

毎日新聞西部本社・吉田健治氏と同大分支局長・石田雅教氏の企画によって、毎日紙上の『終わりよければ』の連載が始まりましたが、それが本書誕生の端緒です。連載が始まつて間もなく、創思社代表・上山良吉氏から出版申し込みを入れをいただく好運に恵まれ、原稿と素資料を提出するだけで、こんな立体的な出来ばえになりました。連載中は各方面から激励をいただくなど、たくさんのご高芳志に包まれて生まれた本書は、幸せいっぱいです。厚くお礼申しあげます。

過分の序文をくださった永杉喜輔先生、どうもありがとうございました。

吉田嗣義

一九九〇年三月

『終わりよければ』
了